

フィリピンの乳母 (yaya) と子供 (alaga) の関係性

マニラの富裕層・中間層の家庭から

平成 27 年入学
派遣国：フィリピン
大村 雪香

キーワード：乳母、家族・親族関係、イマジンド・キンシップ、リレーテッドネス

対象とする問題の概要

マニラにおいて地方の貧困層出身の出稼ぎ労働者であるヤヤ（乳母）と富裕層・中間層家庭のアラガ（彼らに育てられた（る）人）が、どのような関係を構築しているかを明らかにし、その関係性をフィリピンにおける「家族・親族関係」の範囲から考察する。ヤヤ側、またアラガ側の視点から見た両者の捉え方を明らかにし、両者の「繋がり（リレーテッドネス）」、「社会的母」、「創造された親族関係（イマジンド・キンシップ）」としてのヤヤや、ヤヤの生物学的母との代替性などについて考察する。本研究では、アラガである富裕層・中間層に主に焦点を当て、富裕層・中間層の視点から見たヤヤ、ひいては貧困層に対する捉え方を明らかにしたい。ヤヤとアラガの関係性を明らかにすることで、そこにフィリピン社会に内在する、社会的格差や階層間断絶がどのように反映されているのか、またはいないのかを明らかにする。

研究目的

本研究は、今までほとんど研究が行われていないフィリピン国内の家内労働従事者、特に乳母（ヤヤ）の家庭内役割と位置づけを考察するものである。家内労働従事者に関する研究は数多くあるが、そのほとんどが Oversea Filipino Workers (OFW) と呼ばれる海外出稼ぎ労働者に関するものである。そして、これらの労働者はフィリピン国内で家内労働に従事する人々とは、家庭の経済状況や最終学歴などの状況が異なり、多くが中高等教育を受けた中流下層階層 (Lower middle class) に属する人々だ。しかし、フィリピン国内の家内労働従事者は、より下層の階層（貧困層）出身者が多い。よって、フィリピン国内の家内労働従事者を対象とする本研究は、従来の家内労働従事者研究と異なる視座と展望を提供でき、意義がある。また、従来のフィリピン社会の階層研究であまり語られてこなかった中間層以上、特に富裕層の貧困層に対する目差しを取り上げることで、フィリピン研究に新しい視座と理解を投げたい。

フィールドワークから得られた知見

本調査ではタガログ語の学習とともに、アラガ（ヤヤに世話をされる子供）29名、ヤヤ（乳母）28名、そしてアモ（ヤヤの雇用主）1名への英語とタガログ語によるインタビューと、文献調査を行った。ここで明らかになったのは、ヤヤとアラガはお互いを「家族 (pamilya)」として認識していることである。一家庭でヤヤとして働いている年数が長いほど、その関係性は密接であり、アラガにとっても「第二の母」と認識されている場合が多い。ここでは両者に生物学的な繋がりはなく、その親密性や保護者・被保護者としての自覚によって、「創造された親子関係（イマジンド・キンシップ）」が築かれている。この関係性を成り立たせている「繋がり（リレーテッドネス）」とは何かを今後深く考察する必要がある。

る。また、その反面、ヤヤは生物学的母とは取って代わることのできない存在でもあり、アラガとヤヤの関係性には上下のヒエラルキーが存在する。そしてそれは子供の成長とともに変化する。

また、ヤヤという単語には明確な定義がないということが明らかになった。雇用者家庭の経済状況によってヤヤの役割も変化し、ヤヤを1人しか雇わない場合には家事を主な仕事とするカサンバハイ（家事労働者）との顕著な差異はなくなる。しかし、より経済的に豊かな家庭では、2-3人の家内労働従事者を雇っているため、ヤヤは子供の世話のみを仕事内容とし、多くの場合で他の家内労働従事者より上の立場に立っており、より多くの信頼を雇用者より得ていることが多い。その場合、ヤヤはカサンバハイとは大きく異なり、両者の間にはヒエラルキーが存在する。今後は、これらの明らかになった事実を人類学やフィリピン社会における家族の定義、家庭経済学などを援用し、論理的枠組みから考察する。家族の枠組みから考察することで、親密圏の労働者と子供の関係性を、単に雇用者－労働者という関係性でなく、より「親密性」に則した形で捉えられる。

今後の展開・反省点

今回のフィールドワークでは、時間的制約や調査対象者との連絡調整のミスや誤解などにより、予定していた全ての調査対象者にインタビュー調査を行うことができなかった。また、調査対象者をヤヤとアラガのみに狭めてしまったため、雇用者であるアラガの両親を調査対象者として設定していなかった。そのため、子供の親の視点が欠ける結果となってしまった。また、アラガとして調査した対象者は、過去にヤヤがいたという回想に頼るインタビューになったが、ヤヤは現在、子守を仕事としている人たちが対象者となっており、両者に時間的差が生まれてしまった。そのため、両者の社会背景を考慮する際の障害となってしまった点を反省している。今後は、今回の反省点を踏まえつつ、今回インタビューできなかった家内労働従事者の人権保護のための NGO や、ヤヤの雇用主などにも対象者を広げ、インタビュー調査や観察を行いたい。



カウンターパートのアテネオ大学の
秘書さんと



タガログ語の語学学校の友人と先生たちと



アテネオ大学附属小学校のヤヤ待合スペースにて